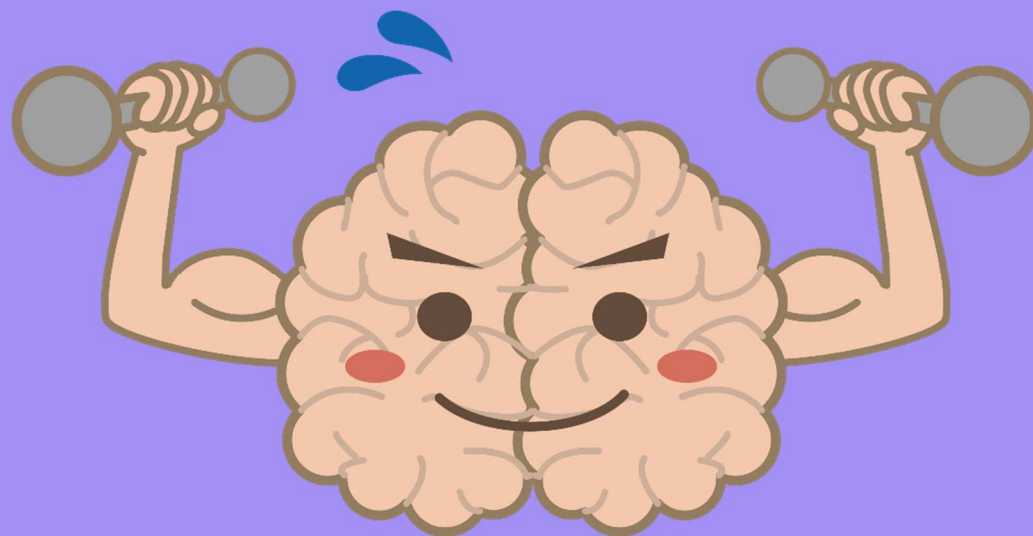


# 65歳から脳を守ろう 理事長コラム

第14回 令和7年（2025年）6月

## 「レビー小体型認知症はどんな認知症ですか」

65歳以上で介護が必要になる疾患の最も重要なものは、認知症というお話をこれまでしてきました。第10回理事長コラム（令和7年3月）でお話ししましたように、認知症の中で最も多いものはアルツハイマー型認知症、ついで血管性認知症、レビー小体型認知症です。



アルツハイマー型認知症【※1】は脳にアミロイド $\beta$ が蓄積して神経変性を起こす病気、血管性認知症は脳動脈とくに実質内（臓器の機能を担う主要な細胞や組織に存在すること）の小動脈が細動脈硬化、血管破綻等を起こし脳に血流が十分に行き渡らない病気です。

【※1】アルツハイマー型認知症：脳の神経細胞が死滅し、脳が小さく萎縮することで症状が現れる認知症。



認知症全体の約5%を占めるレビー小体型認知症【※2】は、 $\alpha$ シヌクレイン【※3】というたんぱく質が脳皮質の神経細胞に蓄積、神経変性を起こす病気です。 $\alpha$ シヌクレインが中脳の黒質【※4】というところに蓄積するのがパーキンソン病ですので、両疾患は同じ原因物質で発症していると考えられています。

【※2】レビー小体型認知症: 脳にレビー小体というたんぱく質の塊ができることで、神経障害が引き起こされる認知症。

【※3】 $\alpha$ シヌクレイン: 主として神経細胞のシナプス前終末で発現される140のアミノ酸からなるたんぱく質。

【※4】中脳の黒質: 脳幹の中脳にある小さな神経核で、運動の制御に関わるドーパミン作動性神経細胞(神経伝達物質であるドーパミンを産生する神経細胞)のある部位。



アルツハイマー型認知症は、記憶障害が主体であるのに対して、レビー小体型認知症は、幻視、変動を伴う注意障害、動作緩慢・歩行障害（パーキンソニズム）が主体で、繰り返す転倒、失神等もよくみられます。幻視は特徴的で、子供、外国人、亡くなっている配偶者、犬、猫等が非常に鮮明に見えています。ただし声は聞こえません（声が聞こえるときは幻聴で統合失調症【※5】など精神科疾患を  
考えないといけません）

【※5】統合失調症：考えや気持ちがまとまらなくなる状態が続く精神疾患。

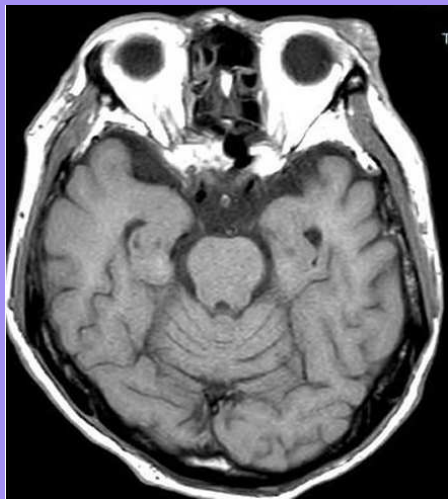


脳MRIでは明らかな異常がないことが多いですが、パーキンソン病同様に脳ドパミントランスポートシンチ【※6】では両側基底核【※7】の集積が低下（脳ドパミントランスポートシンチ図の矢印部分）、心筋MIBGシンチ【※8】では心臓（黄色点線部）への取り込み低下が観察され、診断に有用です。

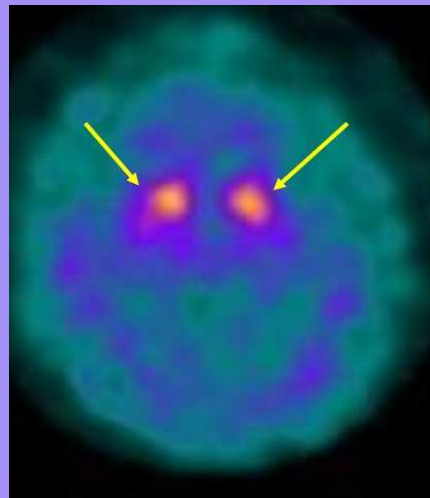
【※6】脳ドパミントランスポートシンチ：脳内のドパミン作動性神経細胞（神経伝達物質であるドパミンを産生する神経細胞）の終末部に存在するたんぱく質を画像化する検査。

【※7】両側基底核：大脳皮質と視床・脳幹を結びつけている神経核の集まり。

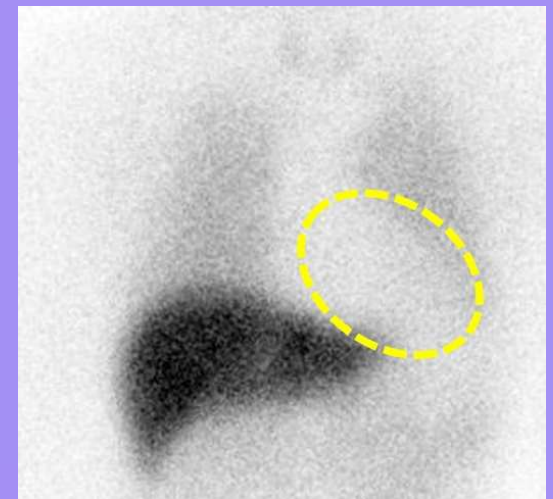
【※8】心筋MIBGシンチ：心臓の交感神経終末部に取り込まれ、交感神経機能を可視化するもの。



脳MRI



脳ドパミントランスポートシンチ



心筋MIBGシンチ

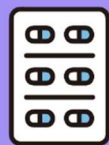
治療ですが、幻視、認知機能低下には、アセチルコリンエステラーゼ阻害薬（ドネペジル等）【※9】が症状改善に有効な場合が多いです。しかしパーキンソニズム（動作緩慢歩行障害）に対するレボドパ製剤【※11】の効果はパーキンソン病ほど有効ではありません。この病気にはアルツハイマー型認知症で使用可能な抗アミロイドβ抗体【※12】の適応はありません。

【※9】アセチルコリンエステラーゼ阻害薬（ドネペジル）：抗認知症薬で、神経細胞間で情報を伝達する物質アセチルコリン【※10】の分解を阻害する。

【※10】物質アセチルコリン：神経細胞が情報を伝えるために使う化学物質（神経伝達物質）の一種。

【※11】レボドパ製剤：脳内へ移行し、神経伝達物質ドパミンを増やすことで、パーキンソン病の症状を改善する働きがある。

【※12】抗アミロイドβ抗体：アミロイドβ（脳内で生成されるたんぱく質の一種）に結合し、これを減少させることで病気の進行を抑制する。



この病気では、鎮静目的でよく使用される抗精神病薬(ドパミン受容体拮抗薬)【※13】例えば、ハロペリドール【※14】など)に対する感受性が高く、抗精神病薬の投与により動けなくなったり呼びかけに対する反応が悪くなったりすることがあるので注意が必要です。また自律神経障害を伴うため、立ち上がった際の血圧低下に注意が必要です。パーキンソン病と同様に発症前から、寝言、夜間に手足をバタバタさせるなどのレム睡眠行動異常を示す方が多いです。

次回は認知症への血管危険因子(高血圧など)の中で最近特に重要と考えられる慢性腎臓病の関わりについて説明していきましょう。

【※13】ドパミン受容体拮抗薬:脳内で作られる神経伝達物質ドパミンの作用を阻害または減弱させる薬の総称。

【※14】ハロペリドール:精神疾患の治療に用いられる抗精神病薬の一つ。

